

防災協働社会の実現

自助
共助
公助

個人・近隣からさらに輪が広がり、地域全体が互いに連携・協力して、災害被害の軽減に取り組む社会が「防災協働社会」です。ここでは、様々な協働の事例を紹介します。



防災協働社会とは

防災協働社会とは、災害被害を軽減するため、地域の人々が互いに連携・協力していく社会です。

大規模災害の発生時には、行政のみでの対応には限界があることから、災害現場から人々の救出や避難を行うには、住民相互や自主防災組織、事業所などによる地域の助け合いが非常に大切となるのです。



地域に根ざす自主防災会

大府市横根山自主防災会は、平成19年4月、横根山自治区の分離独立とともに発足しました。現在、区の評議員を中心に約30名の人々が中心となり、約1200世帯の防災・防犯に取り組んでいます。

特徴的な取り組みは町内パトロールです。月1~2回、16組に分かれてそれぞれ分担のルートを巡回し、防災上の危険箇所について報告し合います。また青パトと呼ばれる8台のパトロール車が用意され、週1回のパトロールを行い、毎月15日には8台が一斉に各分担区域を回ります。

年1回、3月に実施する防災訓練は毎年約200名の人々が参加し、公民館を本部にして地域の被災状況を論議する訓練などが行われます。また区の運動会で担架作りや土のう積み体験を競技の中にもり込んだり、町の消火栓近くに住民の人々にその使用方法を講習したり、地域に密着した活動を続けています。



学校と地域の協働

愛知県立半田商業高等学校は、大正15年に半田商業補習学校を半田商業専修学校と改称し、実社会に送り出された卒業生は2万名に及ぶ、歴史のある高等学校です。

半田商業高校では、半田市や地域のNPO法人の人々と協力して、防災教材の制作に取り組んでいます。過去に半田の地を襲った1944年の東南海地震、1945年の三河地震、1959年の伊勢湾台風で、実際に被害を受けた

方々から生の被災状況を聞き取り、写真やイラストで表現したスライドにナレーションを加えて紙芝居風にまとめ、防災教材を作ります。完成した教材は、県内の学校や自治体などに広く配布します。

高校生にとって、単に被災体験を聞くことにとどまらず、命の尊さを学び、また命を落とさないために何をすべきか考えることを重視して、取り組んでいます。



「防災意識 地域で高め 助け合い」平成19年度防災標語 優秀作品

地域とボランティア団体の協働

「Bi-Vo」は、バイクによる災害ボランティア活動を行う団体です。なごや災害ボランティア連絡会に加盟し、また各メンバーの住む地域とのつながりを重視して、市町村の防災訓練などに参加しています。



災害時には町をバイクで回り、被災状況などの情報収集をしてボランティアセンターに連絡したりします。また道路が崩落しても、バイクなら狭いところに入っていきます。救援物資を積んだトラックの先導となり、道路の被災状況を先に確認してトラックに知らせ、安全に到着させることもできます。自分と家族の安全を確保した上で、自分にできることをする「等身大のボランティア活動」をめざしています。

平常時は展示イベントに積極的に参加しています。防災用品に備わっている展示品の中で、バイクは目立ち、子どもたちに大人気です。



病院と地域の協働

医療法人大塚会病院は、大正13年に開設され、地域の人々の様々な疾患に対応する総合病院です。県から災害拠点病院の指定を受け、救急医療に力を入れています。災害時にはエアテントを使ったトリアージ等、県や市と連絡を取り合いながら、被災した人々の治療にあたります。

春には毎年、9町内会と合同で防災訓練を実施しており、地域の人々200名近くが参加します。今年は、新潟県中越沖地震で救護活動に参加した病院スタッフが中心となり、防災の心得を人々に説明したり、応急処置の実施訓練を行ったりしました。

災害に強い病院として、地域への貢献をめざしています。



企業と地域の協働

株式会社イノアックコーポレーションは、ゴム・ウレタン・プラスチックなど複合材をベースとした素材メーカーで、生活・環境用品から自動車の部品までを作っています。

イノアック安城事業所では、消防車を30年にわたって保有しており、現在は3代目になりました。常に7~8人の人々が操作できるようにしており、近隣で火事などが起こったときは自主的に駆けつけ、消防署員が到着するまで初期消火の手助けをすることもあります。

災害時には、一時的な避難場所として駐車場を開放したり、給水タンクの水を利用して給水活動を行うことも計画しています。またAEDを正門付近に設置して、一般の人でも使用できるようにするなど、きめ細かな社会貢献を行っています。

